

「を」格に於けるアクセント法

藤原 與 一

一

伊豫大三島の方言は、大體に於て、山陽道方言に屬するが、この言葉で、「を」格に、二通りの現はれ方がある。一つは長音が現はれる場合であり、一つはそこに何も見えない場合である。さうして、その分れ方には、一定の規則性が見出されるのである。

一音節の體言が「を」格をとる場合には、常に長音が生ずる。

例 スーノム (酔を飲む)

キヨキル (木を伐る)

「を」格に於けるアクセント法

スーツクル (巢を造る)

キーツカウ (氣を遣ふ)

二音節以上の體言の場合は、次の如くなる。

(一)上中型・上中：型アクセントの語が「を」格をとる場合には、そこに何も現はれない。

例 アセカク (汗をかく)

ホタルトル (螢を捕る)

(二)下中型・下中：型アクセントの語が「を」格をとる場合も、右と同様である。

例 ウメツケル (梅を漬ける)

「を」格に於けるアクセント法

八二

モミマク (粃を播く)

キモノキル (着物を着る)

サクラウエル (櫻を植ゑる)

(註)これは「を」をつけた時に「ウメを」「キモノを」のアクセントになるのを言ふ。事實この類は、音の高低差度が下・中の關係なのである。

「モミを」「サクラを」などの様に、「を」になつて音の高いもの、又は二音節以上低くてのち高まつては「を」まで高いものも、體言としては下中(・・)型アクセントの語と言へるのである。

(三)下上型・下上：型アクセントの語が「を」格をとる場合には、そこに長音が現はれる。

例 ニク|ク|ク (肉を食ふ)

アタ|マ|タタク (頭を叩く)

(註)「を」をつけてみた時、「ニクを」「アタマを」の様に「を」の所で音が下がるのを言ふ。事實この

類は、「ウメを」などと成るものとは區別され、それに於けるよりも、確かに音の高低差度が大なのである。「ウメを」などは、これに比して明かに、下中(・・)型とされるのである。

(四)下上中型・下上中：型・下上：中型・下上：中：型(下：の場合もある)等のアクセントを有する語が「を」格をとる場合には、そこに何も現はれない。

例 オモ|チ|カウ (玩具を買ふ)

アサ|ガ|オウエル (朝顔を植ゑる)

アオ|ゾ|ラミル (青空を見る)

ウン|ド|ク|アイスル(運動會をする)

結局、「中」の音に終る語が「を」格をとる時にはそこに何も現はれず、「上」の音に終る語が「を」格をとる際にはそこに長音が現はれると言へる。これは發音過程から觀て、如何にも理由のあることであらう。

たゞ一音節語の場合は、語が特定の短いものなので、事情別種に属するものがある如くである。

二

次に四國の一地（伊豫東部）に就いてみると、上掲の例語は

- 汗をかく || アセカク
螢を捕る || ホタルトル
梅を漬ける || ウメツケル
穀を播く || モミマク
着物を着る || キモノキル
櫻を植ゑる || サクラウエル
肉を食ふ || ニクク
頭を叩く || アタマタタク
玩具を買ふ || オモチャカウ
朝顔を植ゑる || アサガオウエル
青空を見る || アオゾラミル

「を」格に於けるアクセント法

運動會をする || ウンドーカイスル

の様に發音される。すべて「を」格に何も現はれてゐない。さうして、各體言は、少くとも明瞭な「上」音よりは、低い音で終るものである。こゝに、前と同様の原則が認められる。前地で下上型（下上型）の語も、ここでは「ニク」、「アタマ」（アタマを）の様に、アクセントが違ふので、長音などは生じない。中國に對し四國一般で、「を」格に長音又は拗長音が現はれることの殆どないのは、この様にして、語のアクセントが大部分明瞭な「上」音では終らないのによるものであらう。

たゞ一音節語の場合は

- 酔を飲む || スーノム
木を伐る || キーキル
巢を造る || スーツクル
氣を遣ふ || キーツカウ

「を」格に於けるアクセント法

の様に、何れも「を」格が長音に現はれてゐるのは、前地と同様、特別の事情によるものと考へられる。この地では、「齒が抜けた」も、「ハーヌケタ」と言ふ。

所謂「を」格に於いては、以上の様に、アクセント法として解し得るものがあると思ふ。一